

14	神奈川県立横浜修悠館高等学校	24～26
----	----------------	-------

平成26年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

高等学校における特別な教育的ニーズを有する生徒の自立及び円滑な社会参加を可能とする教育課程の編成及び教科・科目の学習内容、指導方法及び評価方法の研究

2 研究の概要

本研究では、特別な教育的ニーズを有する生徒に対して、①高等学校学習指導要領で定められている必修科目である「国語総合」又は「国語表現Ⅰ」、「数学Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅰ」に替えて、これらの教科の目標を踏まえつつ特別支援学校学習指導要領を参考にした学校設定科目「国語」、「数学」、「英語」を必修科目とし、生徒の自立及び円滑な社会参加に向けた学習内容となるように、社会生活場面を中心として3科目の学習内容を有機的に関連付け、教材開発、添削指導方法及び評価方法に関する検討と実践を行い、②特別支援学校やNPO等と連携して、教育課程全般において、指導方法を研究し、③学校設定科目「キャリア実習」を設置し、望ましい社会参加を旨として、社会生活に必要なコミュニケーション能力等の技能や習慣を身に付けさせるための指導・評価方法を研究することにより、軽度の知的障害や発達障害のある生徒に対して、後期中等教育が行う支援方法について提言する。

3 研究の目的と仮説等

(1) 研究仮説

現状として、本校には、小学校段階からの不登校経験を持つ生徒や、発達障害等の特別な教育的ニーズを有しながらも、専門機関等による診断が未受診の状態では高等学校まで進学している生徒が在籍している。また、発達障害に併せて知的障害のある生徒も在籍しており、将来の社会参加に向けて特別支援学校等と連携した学習支援と就労支援が強く求められている。

発達障害や知的障害のある生徒は、小学校段階からの知識や技能の習得が断片的になっているケースが多く、高等学校での学習や生活に多くの困難を抱えている。そのため、将来の自立と円滑な社会参加に向けて、個々の教育的ニーズに応じた学習指導及び就労支援が強く求められている。教科では現行の高等学校学習指導要領の枠組みを超えて、実質的な生活に必要な力を身に付けることで社会参加に向けての支援になる。

通信制の課程では、学習指導が面接指導及び添削指導によって行われることから、全日制や定時制の課程に比べ、より生徒一人ひとりに応じた指導を行うことができるため、特別な教育的ニーズを有する生徒を、それぞれの教育的ニーズに即して支援するための教育課程や指導方法を開発することが可能となる。

教育課程の特例として、特別な教育的ニーズを有する生徒に対して、高等学校学習指導要領で定められている必修科目である「国語総合」又は「国語表現Ⅰ」、「数学Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅰ」に替えて、これらの教科の目標を踏まえつつ特別支援学校学習指導要領を参考にした学校設定科目「国語」、「数学」、「英語」を必修科目とし、生徒の自立及び円滑な社会参加に向けた学習内容になるように、社会生活場面を中心として

3科目の学習内容を「国語」を中心に有機的に関連付け、教材開発、添削指導方法及び評価方法に関する検討と実践を行うことにより、高等学校学習指導要領が目標とする力を身に付けるとともに、直接生活に必要な力をつけながら、自立と社会参加に向けて、生徒の潜在能力を最大限に伸ばす適切な学習指導が可能となる。

また、特別支援学校やNPO等との連携により、生徒一人ひとりの学習活動を着実に単位修得と卒業に結びつけ、卒業後の円滑な社会参加につなげることができる。

さらに、学校設定科目「キャリア実習」を設置し、生徒の個性に応じた社会生活に必要なコミュニケーション能力等の技能や習慣を身に付けさせるための指導・評価方法の研究と実践を行うことにより、生徒の自立及び円滑な社会参加が可能となる。

(2) 教育課程の特例

特別な教育的ニーズを有する生徒に対して、特別支援学校学習指導要領を参考にした学校設定科目「国語」、「数学」、「英語」を必修とし、それぞれの履修をもって、高等学校学習指導要領で定められている必修科目である「国語総合」又は「国語表現Ⅰ」、「数学Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅰ」の履修に替える。

また、普通科において、卒業に必要な単位数に含めることができる学校設定科目に係る修得単位数は合わせて20単位とされていることとは別に、学校設定科目「国語」、「数学」、「英語」の履修に係り修得した単位数を卒業に必要な単位数に含めることができるものとする。

また、学校設定科目「キャリア実習」を開講し、その効果の検証をする。

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

平成24年度は、学校設定科目「国語」（6単位）を開設し、個別支援スクーリング（対象生徒1名）で実施した。ソーシャルスキルトレーニング（SST）の視点を取り入れ、自己紹介、生活の記録、慣用表現（時候の挨拶）などの生活に関連した学習を行って、生徒の学習意欲を喚起し、学習内容の定着に結び付いた。また、「国語」、「数学」、「英語」の有機的な結び付け、実生活の中で活用できる知識の習得を目指したが、教科特性の違いなどから3科目を有機的に結び付けることは難しいことが明らかとなった。

平成25年度は、3科目それぞれにおいて、社会生活場面の中での活用に重点を置いていくこととし、各教科の学習の基礎となる「国語」を中心とする方向性で研究を進め、「国語」、「数学」、「英語」及び「キャリア実習」の実施を通して、生徒の学習状況、理解状況などから科目の目標、内容、教材、添削指導や面接指導の指導方法、評価についてさらに検討を行うこととした。

平成26年度は、学校設定科目「国語」、「数学」、「英語」及び「キャリア実習」の実施を通して、生徒の学習状況、理解状況などから科目の目標、内容、教材、添削指導や面接指導の指導方法（調べ学習から家庭学習への拡張やスクーリングでの生徒の質問を誘発させるような課題設定など）、評価についてさらに検討を行った。また、「国語」、「数学」、「英語」の3科目の目標・内容について提言をまとめた。研究を終えるにあたり、今後の本校の教育課程に根付かせる方策を検討した。研究の成果を公開授業など様々な場面で、特別な教育的ニーズを有する生徒に対して後期中等教育が行う支援方法について共通する課題を持つ学校に提供した。

(2) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	<p>校内委員会 4月26日、5月10日、5月22日、6月13日 6月28日、7月22日、9月10日、11月12日 12月17日、1月15日、2月13日 3月25日</p> <p>職員打ち合わせ 5月10日、11月20日、1月21日</p> <p>4校連絡会（本校と連携する特別支援学校等との会議）8月27日</p> <p>学校訪問等 横浜市立日野中央高等特別支援学校 6月29日 横浜市立二つ橋高等特別支援学校 7月4日 日々輝学園高等学校 9月24日 生蘭高等専修学校 9月25日 福岡県立東鷹高等学校 10月26日 徳島県立みなと高等学園 11月21日 兵庫県立阪神昆陽高等学校 11月26日 東京都立足立東高等学校 12月7日 神奈川県立東部総合職業技術校 1月28日</p> <p>運営指導委員会 7月12日、9月27日、11月29日、2月26日</p> <p>保護者、職員対象講演会 1月13日</p> <p>教職員による気になる生徒ケース会議 12月4日</p>
第2年次	<p>校内委員会 5月1日、6月24日、9月12日、10月15日、 11月19日、12月3日、1月15日、2月7日、3月6日</p> <p>職員打ち合わせ 5月13日、9月12日、11月20日 2月17日</p> <p>4校連絡会（本校と連携する特別支援学校等との会議）7月18日</p> <p>学校訪問等 授業力向上フォーラム(愛知県) 8月25日 LD学会第22回大会 10月12日、13日、14日 NPO法人フリースペース「たまりば」 10月18日 神奈川県立綾瀬西高等学校 11月8日 神奈川県立城山高等学校 11月22日 神奈川県立横須賀大津高等学校 12月12日 特別支援教育公開研修会(長野県) 11月23日 国立特別支援教育総合研究所セミナー 1月30日、31日 TEACCH コラボレーションセミナー 2月15日、16日</p> <p>中間発表会 10月17日</p> <p>運営指導委員会 7月3日、10月7日、1月27日、3月12日</p> <p>教職員による気になる生徒ケース会議 11月21日</p>
第3年次	<p>校内委員会 5月1日、5月27日 6月18日、7月30日、9月16日、 10月15日、11月26日、12月、1月、2月、3月</p> <p>職員打合せ 9月8日、10月14日 2月23日</p> <p>学校訪問等 全国高等学校通信制教育研究会東京大会発表参加 6月11、12、13日</p>

	三重県立北星高校本校訪問（通信制高校のユニバーサルデザインを基にした学習支援の背景・経緯と具体的取組について） 7月10日 関東地区高等学校通信制教育研究大会家庭科分科会 9月18日 横浜ひなたやま支援学校の夏季公開講座 8月19日 LD学会第23回大会 ポスター発表参加 11月23日、11月24日 文部科学省学校訪問 7月24日 文部科学省「高等学校における遠隔教育の在り方に関する検討会議（第3回）」傍聴 9月9日 職員・保護者学習会 9月10日 プロジェクタ、タブレット説明会（職員研修）9月22日、25日 公開授業および研究協議会 10月16日 電子黒板研修会（職員研修）10月30日 「県立高校教育力向上事業Ver. II」公開授業 12月4日 運営指導委員会 7月1日、10月28日、1月13日、2月25日 教職員による気になる生徒ケース会議 12月1日 最終報告会 2月25日
--	---

（3）評価に関する取組

	評価方法等
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ・全生徒・保護者へのアンケート調査（平成25年1月実施） ・レポート完成率及び単位修得率の調査（平成25年2月実施） ・運営指導委員会による1年次の振り返りと成果の確認
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ・全生徒・保護者へのアンケート調査（平成25年12月実施） ・レポート完成率及び単位修得率の調査（平成26年2月実施） ・運営指導委員会による2年次の振り返りと成果の確認 ・実習終了後の生徒の意識調査
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> ・全生徒・保護者へのアンケート調査（平成26年12月実施） ・レポート完成率と単位修得率の調査（平成27年2月実施） ・運営指導委員会による3年次の振り返りと成果の確認 ・実習終了後の生徒の意識調査

5 研究開発の成果

（1）実施による効果

「国語」、「数学」、「英語」及び「キャリア実習」を実践・展開するとともに、各科目の目標、内容及び内容の取り扱いについて実践を通して検討した。

指導方法の検討として、スクーリングや報告課題に関する職員の共通理解事項（「修悠館スタンダード」）の改善を特別支援学校の指導方法を参考にしつつ、職員の意見交換を組み込んで継続的に実践し検討した。また、学会等への参加で、積極的に外部参加者との意見交換を行い、今後のバージョンアップの参考にした。

「国語」、「数学」、「英語」について、意欲はあるものの学習の進まなかった生徒を対象とし、小人数やチームティーチングで学習を進めることで、以下の効果がみられた。

- ①適応できる生徒とできない生徒の類型が把握できた。
適応できた生徒は、目的意識があり、基本的な生活習慣が確立している。一方、適応できなかった生徒は、昼夜逆転の傾向が改善できない、学校生活に対する拒否感が固着している等の背景があった。
- ②学習の場面で明らかとなる学習者個別の具体的な課題に対し、その場での即時的解決支援が効果を上げた。集団での学習の流れの中で生徒が納得し、そのことにより、毎時の学習の目標に対し意欲をもって取り組むことができた。「わかった」「できた」という実感が意欲につながった。
- ③きめ細かい指導の中で、生徒は今まで理解できなかったことが理解できるようになり、達成感が持てた。

「国語」、「数学」、「英語」について、社会での活動をイメージした学習内容であることから、生徒に以下の効果がみられた。

- ①日常での疑問や戸惑いを言葉にして表現できるようになった。
- ②他の人の経験を聞き、自分の経験を話すことで、共感し、今後様々な判断をする際の参考とする発想が生まれた。
- ③生活の場面で目にするメディア（新聞広告、フリーペーパー、インターネット検索等）から積極的に情報を得る態度が涵養された。
- ④また、指導における効果として、「国語」、「英語」で数え方、数量の表現、時間の表現を工夫し、具体的な遠足や旅行の計画の場面などで必要となる計算や計量は、四則演算にとどまるものであったが、社会生活の中でそれらを使う場面があることが確認できた。一方、「数学」で行う抽象思考の訓練については、教科の特性として独自のものであり、社会生活の場面で役立つという視点にこだわる必要はないという認識を得た。高校レベルの学習内容が学習者自身に自信を与えることもよい効果となっている。

「国語」、「数学」、「英語」について、必修科目の単位修得ができることから、以下の効果がみられた。

- ①今年度の努力を肯定的に捉えることができ次年度の学習への意欲につながった。
- ②生活習慣を見直すことで欠席が減り、学習の機会を自ら生かそうとする意識が芽生えた。
- ③通信制のルールを理解し、学習の積み重ねにより成果を挙げられるようになったことで、学習に向き合う姿勢が消極的となることが少なくなった。
- ④「英語」において、発声や姿勢などの初歩的基本的なコミュニケーション力の訓練が行えたことにより、「国語」での社会人としてのソーシャルスキルトレーニングが、円滑に実施できた。
- ⑤実質単位修得率（＝単位修得者÷科目登録者のうち面接1時間以上取得又はレポート1通以上提出の活動がある者）については、次のように向上した。

平成 24 年度	国語総合：38.2%	数学 I：49.4%	英語 I：58.6%
平成 25 年度	国語総合：45.9%	数学 I：51.0%	C 英語 I：63.0%
平成 25 年度	国語：69.2%	数学：50.0%	英語：82.4%

平成 26 年度（前期） 国語： 100% 数学： 100% 英語： 90.9%

これまで人間関係が希薄な中で生活していた学習者が、スクーリングに参加することで、一定のメンバーと活動を共にした。その中で社会性が必要であることに気づき、自発的に自分の課題について解決を模索する傾向がみられた。また、必要な医療上の支援や福祉との連携を作る機会を得た。

「キャリア実習」について、以下の効果が見られた。

- ①実際に毎朝起床し、登校して継続して作業をすることの大変さを実感することができた。
- ②働くことは社会貢献になるということを、集団での清掃作業を通して意識付けることができた。
- ③個別の作業では問題なく行えることも、グループワーク、ペアワークでは、なかなか意志の疎通が難しい場面があることを自己認識させることができた。
- ④コミュニケーション能力について、スモールステップを設定することで次第に自発的に発話ができるようになった。
- ⑤「話す」「書く」という表現が苦手であっても、PCへの入力という手段を用いると抵抗が少なく表現することができた。

（2）実施上の問題点と今後の課題

小集団やチームティーチングでの学習が、個別の課題を有しさまざまな理由で学習が進まなかった生徒に対し有効であり、「国語」、「数学」、「英語」について社会での活動をイメージした学習内容とすることができたが、その内容を今後の本校の教育課程、特に必修科目の内容にどのように組み込んでいくかが課題である。

学習者のつまずきに対処しつつ本時の学習目標を達成すること、そのために少人数展開やチームティーチング等に対応する職員の配置が、学習者に自信を持たせる上で有効だということが明らかになった。通信制の場合、必要最低面接時数を超える程度の面接指導時間を実施するのが一般的であるが、本校の「国語」、「数学」、「英語」を含む平日登校講座はレポート通数の3倍の面接指導時間を実施している。こうした手厚い授業展開は、特に通信制高等学校である本校にとって、職員の配置について定数などによる面で限界がある。

学習支援の方法については、研究3年目を終え、これまでの運営指導委員会での助言、研究大会、学会、研究協議会、研修会等での意見交換を通して、現在のシステム化された学習支援の方法(修悠館スタンダード)を、生徒を含めて教職員全体で循環構造のようにたえず更新していくことが、学習支援の方法を可塑的なものとしていく原動力になっていると確信するにいたった。

「キャリア実習」については、生徒が実践することの難しさや大変さを意識したうえで、「慣れていく、克服していくという指導法」、「自己肯定感を持ちつつ、反省し作業内容を自己評価させる方法」、「作業実習から、さらに職業体験、インターンシップへとレベルアップしていく指導法」などについて、さらに研究が必要となる。